

銚子市粟島台遺跡採集の遺物に関する覚書

小林 清隆・橋本 勝雄

はじめに

粟島台遺跡は、千葉県の北東端である銚子市に所在する遺跡である。昭和9年（1934年）に好古家の吉田文俊氏による調査が行われて以来^(注1)、台地上と低湿地の部分的な発掘が数度行われてきた。

最近では、銚子市在住の郷土史家であり、遺跡の地権者の一人である横田清隆氏が、長年にわたり採集した、旧石器や縄文石器、縄文時代の玉類の一部が紹介され、徐々に資料化が進められてきている（横田ほか2021・小林2023・橋本2024）。

横田氏によって、農作業の傍ら多数の旧石器時代～縄文時代の石器や、縄文土器、土製品、玉類が採集されている。その中には数多くの優品が含まれていたが、残念なことに未報告のものが大半であった。今回の執筆に際しては、資料化の一環とし、当該資料のうち旧石器・縄文時代早・前期に属する隠れた資料に光を当て、その歴史的な位置づけを論じることとしたい。また、従来からコハク玉の生産遺跡と知られてきたが、これまで類例の少ない台地上で採集されたコハクについても紹介する。

1. 採集石器の紹介と歴史的な位置づけ

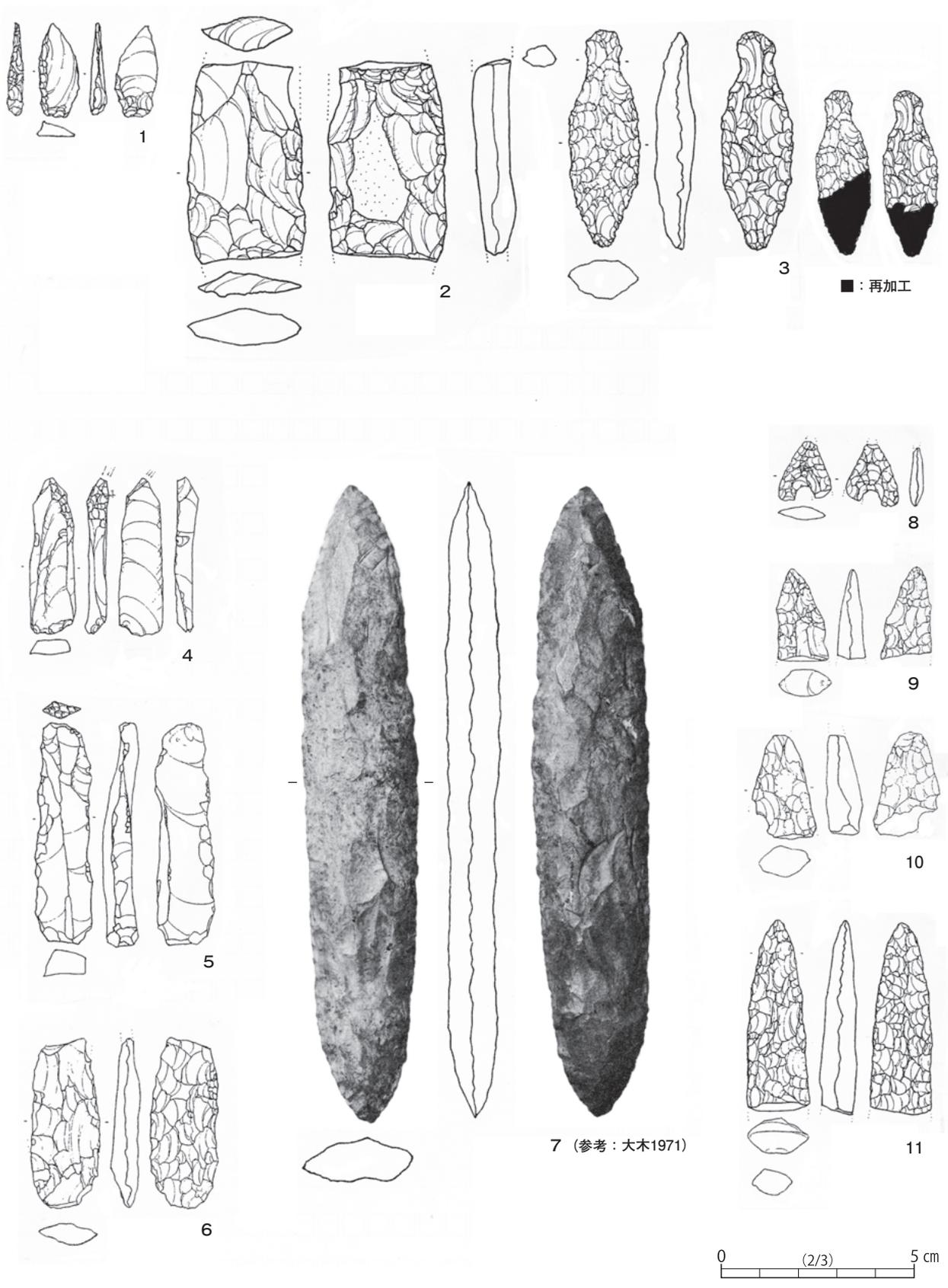
橋本は先の論考でまず、旧石器時代の上ゲ屋型彫刻刀形石器（以下、「上ゲ屋型」）、石刃、大型尖頭器、縄文時代の有舌尖頭器（草創期）、鍬形鏃（早期）、石槍（前期）を資料化した（橋本2024）、今回は、これに加えて新たに、旧石器時代のナイフ形石器・大型尖頭器各1点と、縄文時代前期の尖頭形両刃石匙を紹介する。

第1図1は小型の不定形剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。切出形を呈し側縁には下半部に急角な整形剥離、右側縁には基部付近に裏面加工が部分的に施されている。これに対して、両側縁の上部には平坦な折れ面が残されており、鋭利な刃部は特段認められない。よって切裁具としては機能せず、むしろ小型の尖頭器とした方が良いのかもしれない。ただし、技術形態学的にはナイフ形石器としての特徴

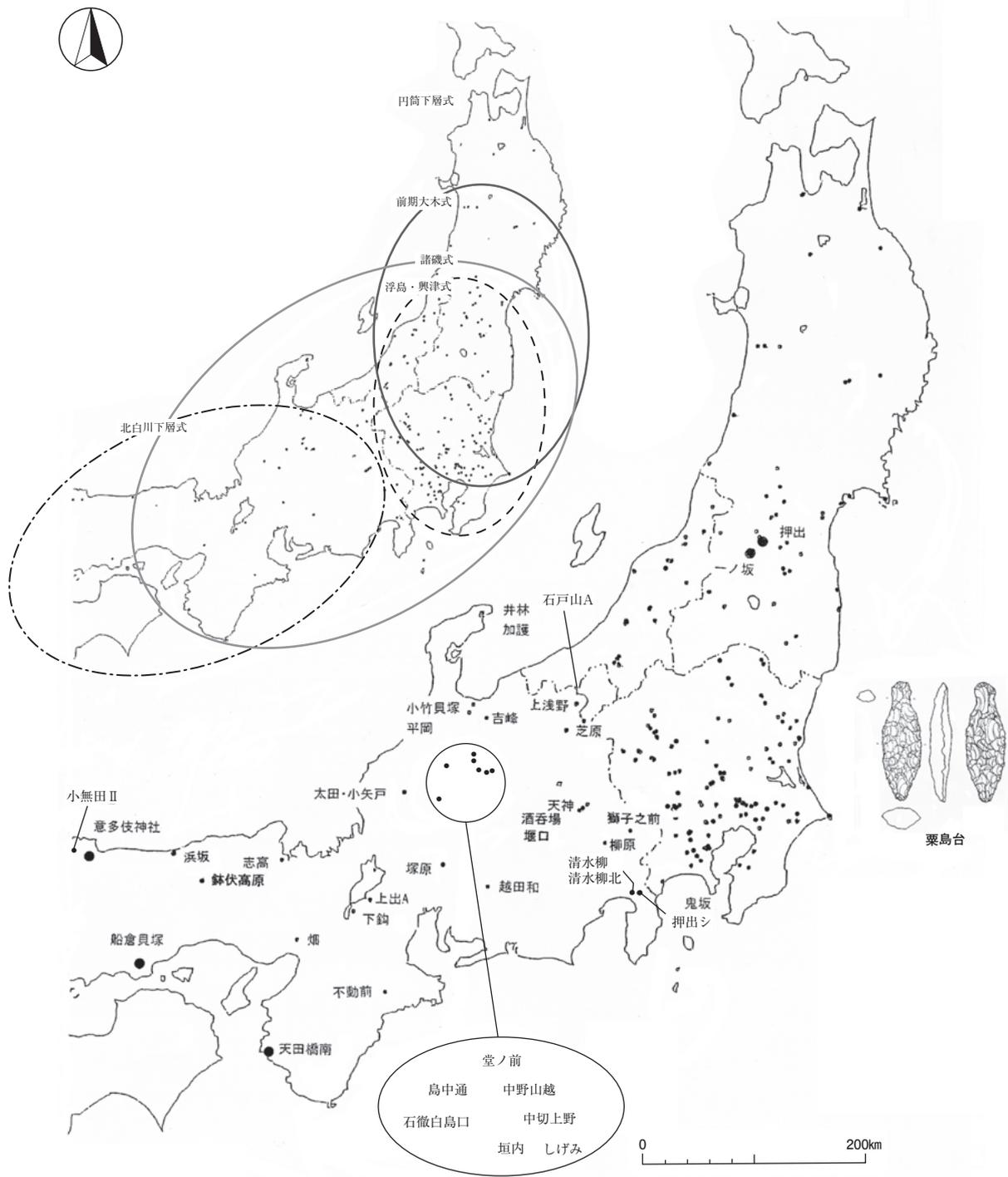
を具備しているためここでは便宜的に当該器種としておく。先の上ゲ屋型彫刻刀形石器と石刃各1点（第1図4・5）とほぼ同時期の所産と推定される。このような採集状況から、ひとつの遺物集中地点が形成されているものと推定される。

第1図2は大型尖頭器の一部である。裏面の中央部には平坦な自然面が残置されており、また剥離面にしてもやや粗雑な印象を受ける。石材の産地は茨城県大洗海岸周辺と推定される。断片的ではあるが、全体の形状は前稿で紹介した二側縁が平行した扁平なもの（第1図7）になろう（橋本2024）。ちなみに第1図7は、かつて粟島台遺跡で採集された、完形を保った石槍であり（大木1971）、参考例として再掲した。残念ながら、現在は所在不明のため詳細な検討は他日を期したい。

第1図3は尖頭形両刃石匙（以下「石匙」）であり、両面加工で表裏の先端部には再加工の痕跡（塗りつぶし）がみられる。前期の大木系石器群に属し、先に紹介した石槍の破片3点（第1図9～11）とほぼ同時期と考えられる（橋本2024）。ちなみに、大木系石器群とは東北地方中部から南部にかけて分布する大木式土器に伴う石器群の総称である。この用語は吹野富美夫によって命名され（吹野1995・2008）、尖頭形両刃石匙（以下、「石匙」）と石槍が主な構成要素となっている。管見では、両者の関連遺跡は、今のところ176か所を数える（萩野谷・橋本2024）。このうち石匙については、太平洋側では千葉・埼玉・東京・群馬（古利根川ライン）、日本海側では新潟方面、さらには近畿方面まで関連遺跡の分布がみられる。東北頁岩製の分布は概ね新潟方面と関東地方で途切れ、現地生産（石材の在地化）が進むが、中には和歌山県天田橋南のように山形県南部から600km以上の距離を隔てて搬入された例もある（橋本2023c）。これに対して石槍は太平洋側では古利根川ラインを越え神奈川県（小田原市羽根尾貝塚ほか）静岡県東部（清水柳）、日本海側では、島根県安来市意多伎（おたき）神社遺跡を南限としており、石匙よりもさらに広範囲に遺跡が分布して



第1図 粟島台遺跡出土石器 (横田清隆氏採集) 上段: 今回紹介 下段: 既報告分 (橋本2024)



第2図 大木系石器群と土器型式（前期後半）の広がり 橋本2024を一部改変
 ※中心地域の東北地方については主要遺跡に限定

第1表 石器計測表

挿図 番号	時期	器種	大きさ (cm・g)				石材	欠損の状況	採集者
			長さ	幅	厚さ	重量			
1	旧石器時代後半(Ⅱc期)	ナイフ形石器	2.5	1.0	0.4	1.0	チャート	ほぼ完形	横田清隆氏
2	旧石器時代終末(Ⅲb期)	大型尖頭器	5.2	3.1	1.0	23.6	ガラス質 黒色安山岩	胴部破片	横田清隆氏
3	縄文時代前期	尖頭形両刃石匙	5.7	1.9	1.1	10.5	赤玉石 (赤碧玉)	完形品	横田清隆氏
4	旧石器時代後半(Ⅱc期)	上ゲ屋型彫刻刀形石器	4.3	1.3	0.6	3.4	玉髄質頁岩	完形品	横田清隆氏
5	旧石器時代後半(Ⅱc期)	石刃	6.1	1.5	0.8	9.4	東北頁岩	完形品	横田清隆氏
6	縄文時代草創期前半	有舌尖頭器	4.8	1.9	0.8	8.0	ガラス質 黒色安山岩	上下両端	横田清隆氏
7	旧石器時代終末(Ⅲb期)	石槍	17.6	3.2	1.5	75.5	不明	完形品	大木衛氏? (参考資料)
8	縄文時代早期前半	鍬形鏃	1.7	1.4	0.4	0.7	東北頁岩	先端・片脚 欠損	横田清隆氏
9	縄文時代前期	石槍	2.6	1.5	0.7	2.6	東北頁岩	端部破片	横田清隆氏
10	縄文時代前期	石槍	2.9	1.6	1.0	4.4	東北頁岩	端部破片	横田清隆氏
11	縄文時代前期	石槍	5.4	1.8	1.0	9.8	東北頁岩	端部破片	横田清隆氏

いる。

なお、東北頁岩製の石匙・石槍が東北地方からの搬入品であることは言うまでもないが、その関東以西への波及の時期をたどれば、いずれも前期前半（花積下層式～黒浜式期）と考えられる。ただし関東以西では、両者の盛行期に差異があり石槍が前期前半であるのに対して、石匙は前期後半（諸磯式期）となっている。その意味では、粟島台の石槍の帰属時期については前期前半の可能性が高い。

2. コハク資料について

ここで紹介する資料は、横田氏が第3図の★印近辺で表採した2点である。表採した近くに、昭和9年（1934年）の吉田文俊氏の、そして昭和15年（1940年）の酒詰仲男氏による推定調査地点がある。

第4図1は玉の欠損品である。平面形態は長楕円形で全体はナツメ玉状である。図の下端部が欠損し、新鮮な破断面が認められる。おそらく最近の耕作などにより欠損したと推測される。遺存部の中位の断面形は円形ではなく、やや歪んだ形状になる。素材の形状を大きく整形することなく、ミガキを施して成品に仕上げたものと考えられる。穿孔は長軸方向に片側から行っている可能性が高い。現状で、長さ31.5mm、幅19.5mm、重さ6.17gである。色調は第5図1のように遺存部は沈んだ赤茶で、破損面は光を当てると美しい赤茶である。

第5図2は破片である。ほとんど風化面が観察され

ず、鮮やかな濃い赤茶色の面が露呈している。耕作などによって表面が剥がれたものと推測される。上部の一部にわずかに風化面が残っており、そこを観察するかぎり、調整が加えられた痕跡は認められない。長さ30.0mm、幅17.0mm、厚さ12.0mm、重さ3.05gである。

当遺跡のコハクは、昭和24年（1949年）の発掘により注目された遺物である（大場ほか1952）。野口義磨氏は、台地から台地と低地との境に設定した調査区において、玉の未成品や破片が出土したと紹介した（野口1952）。以後、コハク製玉類を生産していた可能性が高い遺跡として広く知られるようになり、後年の低湿地の調査において多くのコハクが出土し、実証されていくことになる。

昭和41年（1966年）には、伊藤陸憲氏が台地から下った地点で、完形を保った「琥珀製大珠」を採集し、それを紹介している（伊藤1982）。

昭和48・50年（1973・1975年）に行われた調査は、標高7m前後の低湿地を対象に行われ、130点のコハクが発見されている（寺村ほか2000）。報告書では、「琥珀の出土と攻玉は縄文時代中期初頭の五領ヶ台・阿玉台式土器のころに出現し、加曾利E式土器の時代に最も盛行し、後期の称名寺・堀之内式土器のころに至っていた」と、コハクの縄文時代における時期的な位置づけを推定している（寺村2000）。出土したコハクは、原石や未成品で成品は出土していない。時期的には加曾利E式期と推測される。



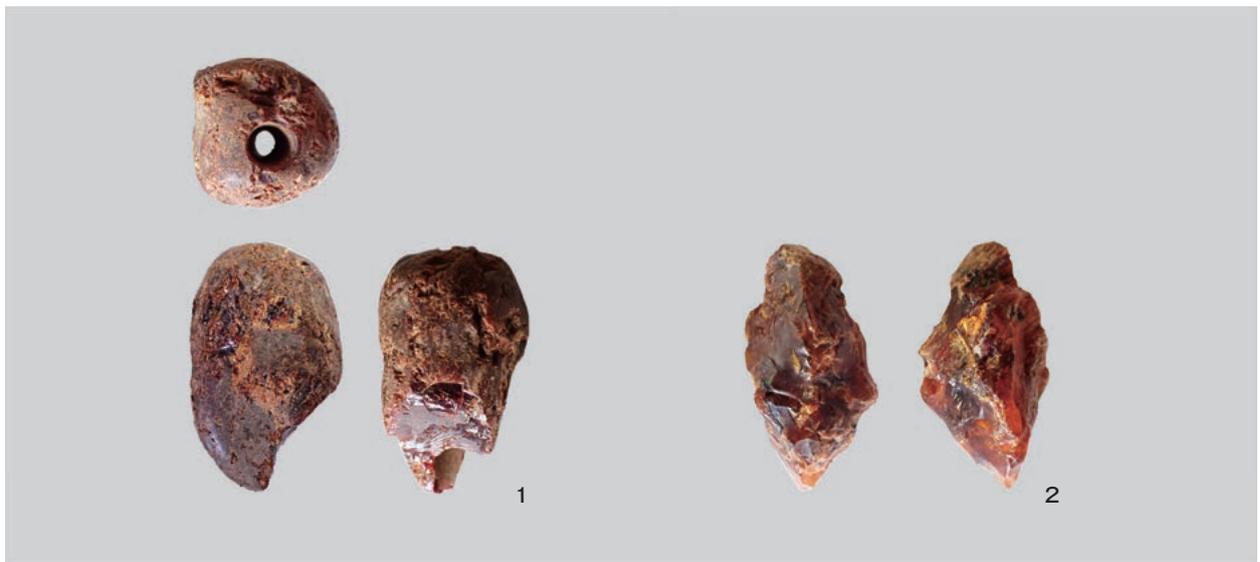
〔千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書〕から改図転載

第3図 コハク採集位置



0 (1/1) 2 cm

第4図 栗島台遺跡のコハク玉



第5図 栗島台遺跡のコハク玉と破片 (S=約1/1)

平成元年（1989年）のスーパーマーケット建設に伴い低湿地の調査が行われた（原田ほか1990）。この調査では、未成品13点をはじめ合計56点のコハクが出土した。成品は皆無である。調査地点は、土器捨て場と推測されている場所で、コハクに伴う土器は、阿玉台式や加曽利E式土器が主体になっている。

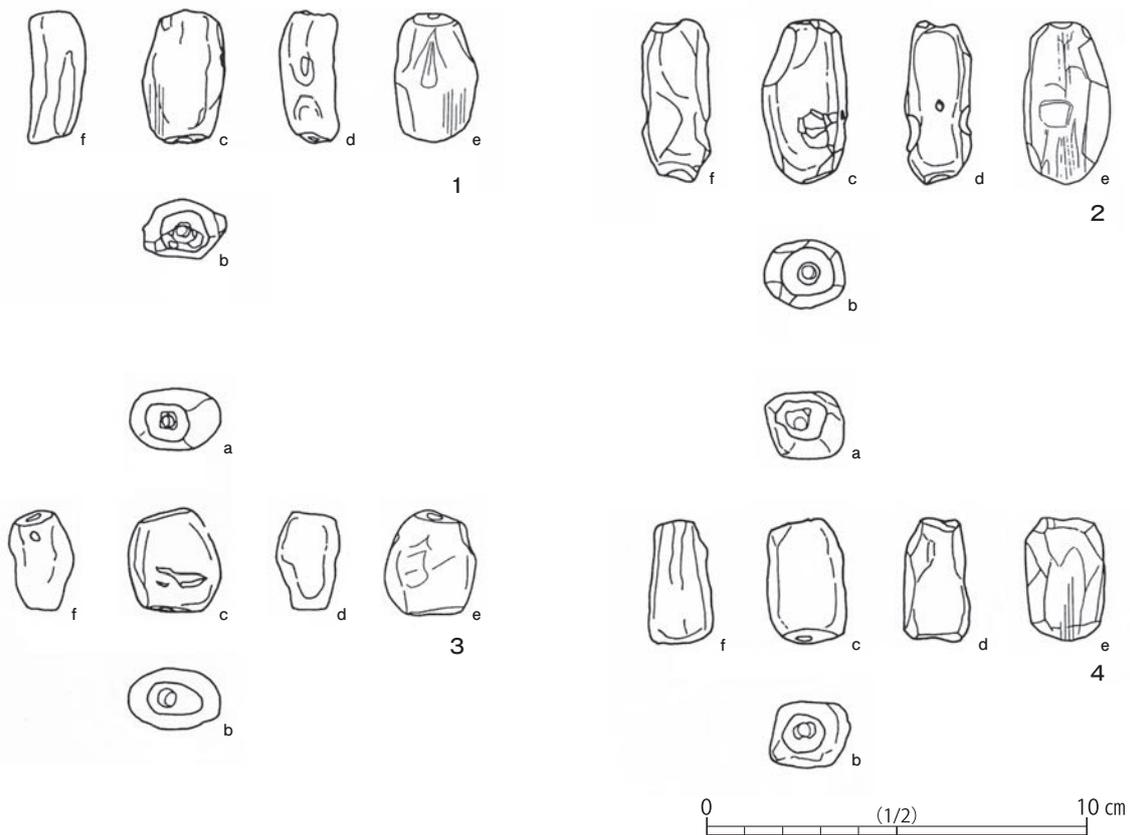
平成2年（1990年）に銚子市教育委員会による台地上の確認調査が行われた（寺村ほか1991）。この調査以前は、主に低湿地が対象地になっており、台地上の状況は不明なところがあった。第3図のとおり台地上にトレンチが設定され、一部は拡張して遺構の調査が実施され、遺構分布が推定されることになった。C調査区では、縄文中期の竪穴住居5軒や土坑16基などが検出され、阿玉台式～加曽利E式土器を出土する竪穴住居1軒を精査している。遺物は土器と石器が出土し、

ほかにコハク片が8点出土した。また、遺跡の北東部に設定されたF調査区では、黒浜式期の竪穴住居を発掘し、土器や石器が発見されている。ただ、ここからはコハクは全く出土していない。

栗島台遺跡については、これまでコハクや土器について、論文等で取り上げられてきている。ここでは個別にふれることはしないが、主な文献を第2表に挙げた。

以上簡単に調査歴について概観した。次に今回紹介した2点のコハク資料について、若干の所見を述べることにしたい。

まず、第4図1のナツメ玉状の玉である。これまでの調査では検出されていない部類である。さらに成品であるという点が注目される。一部欠損しているとはいえ、ナツメ玉状を呈し長軸方向に穿孔された成品で



第6図 丸山遺跡出土コハク玉 (報告書の図を一部改図、転載)

あることは明瞭である。低湿地の調査では、垂飾と考えられる未成品が出土しているが、成品になったものは、採集された大珠を除いては存在しない。ナツメ玉状品は遺跡内で類例がないので、範囲を拡げて探すと、岐阜県大野郡丹生川村（現高山市）に所在する丸山遺跡の出土品に目にとまる（野村ほか1998）。この遺跡では、土坑から7点のコハク玉が出土しており、全点長軸方向に穿孔されている。参考に第6図にその中の4点を掲載した。1は長さ34.1mmで重さ5.9gと計測されている。栗島台例と近似した形状といえる。土坑内に土器が伴わないため、厳密な時期は比定されていない。群馬県松井田町（現安中市）の行田大道北遺跡における諸磯b式期の竪穴住居出土例（長井ほか1997）などから類推し、「縄文前期に属する可能性がきわめて大きいと思われる」としている。なお、産地同定を実施しているが、同定は困難であったと報告されている。

長軸方向への穿孔を行っている例は、山梨県大泉村（現北杜市）の甲ヶ原遺跡Ⅱの出土資料にもみることができる（五味ほか1996）。土坑から出土したコハク玉は、五領ヶ台式土器を伴っており、中期初頭と考え

られている。産地同定を行っており、「福島県いわき産の可能性が非常に高いように考えられる」としながらも、「現時点での産地の限定は避け今後の研究課題としたい」と、慎重な立場を表明している（五味・野代1994）。

以上のような類例から、今回紹介したナツメ玉状品の時期を推測すると、前期～中期初頭の可能性が高いといえるだろう。採集地点は平成2年（1990年）の調査結果から、前期の集落範囲と想定された地域であり、推測の妥当性を補強している。墓に伴う副葬品であったとも考えられる。ただ、これは採集資料であるため、全くの想像にすぎない。同じく第5図2についても、時期はナツメ玉状品と同時期の所産と思われる。

これまで遺跡内において、前期に遡るコハク玉生産を裏付ける確実な資料は検出されていない。2点の資料はその可能性に期待を持たせるものである。

おわりに

以上のように、本稿では、石器については都合3点を紹介した。これに前稿の資料（橋本2024）を加えても、わずか11点にすぎないが、その内容は旧石器時代

の上ゲ屋型・ナイフ形石器・石刃、及び大型尖頭器、縄文時代草創期前半の有舌尖頭器、縄文時代早期前半の鋳形鋸、前期の石槍・石匙など多様であり、かつ希少性に富み少数派といえどもその重要度は高い。ただし、時期別では最も古い時期でも後期旧石器時代後半期であり、比較的新しい段階に偏りを見せている。おそらく農具による掘削が及ぶ範囲（地表下50cm前後）に包含され発見が容易であったためなのであろう。

また、コハクについては、ナツメ玉状の欠損品1点と破片資料1点を紹介した。2点は前期の推定集落域

で採集されており、この時期の玉の可能性が高く、今後は遺跡内における生産の痕跡探しに目を向けていく必要性が高まった。

なお、文責については、1.を橋本が、2.を小林が、はじめに・おわりには両者が負うものである

擲筆にあたって、資料をご提供いただいた横田清隆氏はもとより、氏との仲介の労をお取りいただいた伊藤陸憲氏には謹んで御礼申し上げたい。

第2表 栗島台遺跡に関連する主な文献

著者等	発表年	文 献	発掘年
吉田文俊	1934	「銚子貝塚発見の貝殻類について」	1934
酒詰仲男	1942	「下総国小川町貝塚発掘略報」『人類学雑誌』第57巻第11号	1940
野口義麿	1952	「石器時代の琥珀について」『考古学雑誌』第38巻第1号	
大場磐雄ほか	1952	『古代文化』第22輯	1949 1950
篠崎四郎編	1956	「栗島台遺跡」『銚子市史』	
野口義麿	1958	「千葉県栗島台遺跡出土の土器について」『石器時代』5号	
滝田正俊	1965	「銚子地方の古代遺跡」『銚子の自然』	
寺村光晴	1971	「琥珀の大珠」『新版考古学講座』10特論（下）月報	
寺村光晴ほか	1973	「千葉県栗島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No88	1973
安藤文一ほか	1974	『栗島台遺跡 1973年度発掘調査概要』	
歴史クラブ	1979	「栗島台遺跡」『考古学から見た銚子の文化』	
伊藤陸憲	1982	「千葉県栗島台遺跡発見の「琥珀製大珠」」『考古学雑誌』第67巻第4号	
寺村光晴	1985	「日本先史時代の琥珀」『学部創設35周年 記念論文集』	
杉山孝則	1988	『栗島台遺跡 一部確認調査報告書』	1988
原田昌幸ほか	1990	『銚子市栗島台遺跡発掘調査報告書』	1989
小松 繁ほか	1991	『千葉県銚子市栗島台遺跡発掘調査報告書』	
宮内克巳	1993	「仲有戸遺跡 佐野原北遺跡 荒野台遺跡 栗島台遺跡」	
伊藤陸憲	1993	「千葉県栗島台遺跡発見の石匙型石器について」『宇奈加美』創刊号	
荻 悦久	1994	「琥珀の話」『千葉県史料研究財団だより』第4号	
伊藤陸憲	1994	「栗島台遺跡と吉田文俊」『宇奈加美』第2号	
伊藤陸憲	1998	「千葉県栗島台遺跡発見の有孔石斧」『宇奈加美』第4号	
小松 繁ほか	2000	『栗島台遺跡』	1973 1975
野代幸和	2004	「琥珀玉」『季刊 考古学』第89号	
相京和茂	2007	縄文時代におけるコハクの流通（上）『考古学雑誌』第91巻第2号	
栗島義明	2010	「ヒスイとコハク」『移動と流通の縄文社会史』	
栗島義明	2012	「コハク利用と縄文社会」『考古学ジャーナル』No627	
栗島義明	2012	「コハク製大珠の広域分布」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』	
斎木 勝	2014	「千葉県栗島台遺跡出土の琥珀」『考古学論究』第16号	
千葉県教育委員会	2021	「栗島台遺跡」『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』	
横田清隆ほか	2021	「千葉県栗島台遺跡採集の玉類について」『玉文化研究』第5号	
小林清隆	2023	「銚子市栗島台遺跡採集の玉斧」『研究連絡誌』第89号	
橋本勝雄	2024	「下総台地北東部採集の石器の特質とその意義 —伊藤陸憲氏・横田清隆氏・高野安夫氏コレクションから—」 『千葉文華』第47号	
小林清隆 橋本勝雄	2025	「銚子市栗島台遺跡採集の遺物に関する覚書」『研究連絡誌』第92号	

注

1) 伊藤陸憲氏は、『銚子市史』(篠崎1956)記載の、吉田文俊氏の発掘が昭和8年(1933年)に行われた、ということについて検証するため、地元に残っていた資料を探索した。その結果、昭和9年(1934年)が調査年であったことが明らかになった(伊藤1994)。小林はこのことについて、ヒスイ製玉斧を紹介した際にふれたが(小林2023)、自身の校正ミスにより、「発掘した年が1943年であった」と、文末の注-3の中において記載し、誤解をまねくことになった。ここで「発掘した年が1934年であった」と訂正しておきたい。

引用参考文献

- 伊藤陸憲 1982 「千葉県粟島台遺跡発見の「琥珀製大珠」」『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会 pp.115-118
- 伊藤陸憲 1994 「粟島台遺跡と吉田文俊」『宇奈加美』第2号 宇奈加美考古学研究会 pp.50-55
- 大木衛 1971 「X No22遺跡(取香牧の野馬捕込他)」『三里塚-新東京国際空港用地内の考古学的調査-』千葉県北総公社 pp.177-182
- 大場磐雄ほか 1952 『上代文化』第22輯 國學院大學考古学会
- 小林清隆 2023 「銚子市粟島台遺跡採集の玉斧 - 遺跡2例目のヒスイ製品の紹介 -」『研究連絡誌』第89号 (公財)千葉県教育振興財団 pp.19-21
- 五味信吾ほか1996 『甲ッ原遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター
- 五味信吾・野代幸和 1994 「山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産地同定(1) - 赤外吸収スペクトル分析 -」『研究紀要』10 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター pp.27-46
- 篠崎史郎編 1956 『銚子市史』
- 関根慎二 2008 「諸磯式土器」『総覧 縄文土器』総覧 縄文土器刊行委員会 アム・プロモーションpp.282-289
- 大工原豊 2003 「模倣と模造」『縄文時代』第14号 縄文時代文化研究会 pp.1-29
- 千葉県教育委員会 2021 「粟島台遺跡」『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』 p.68
- 田村隆・橋本勝雄 1984 『房総考古学ライブラリー1 先土器時代』千葉県文化財センター
- 寺村光晴ほか 1991 『粟島台遺跡発掘調査報告書』銚子市教育委員会
- 寺村光晴ほか2000 『粟島台遺跡』銚子市教育委員会
- 寺村光晴 2000 「粟島台遺跡の琥珀」『粟島台遺跡』銚子市教育委員会 pp.399-412
- 長井正欣ほか 1997 『八代二本杉東遺跡 行田大道北遺跡』群馬県教育委員会
- 野口義磨 1954 「石器時代の琥珀について」『考古学雑誌』38巻1号 日本考古学会 pp.65-67
- 野村宗作ほか 1998 『丸山遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 橋本勝雄 2018 「柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器とその評価-国府系ナイフ形石器・上ゲ屋型彫刻刀形石器・本ノ木型尖頭器・出現期石鏃の紹介と関連資料の検討-」『研究連絡誌』第79号 千葉県教育振興財団 pp.15-32
- 橋本勝雄 2021 「続「上ゲ屋型彫刻刀形石器」考-上ゲ屋型の研究(4)-」『研究連絡誌』第85号 千葉県教育振興財団 pp.1-16
- 橋本勝雄 2023a 『先史考古学論考 石器と先史文化』六一書房
- 橋本勝雄 2023b 「大木系石器群の関東以西への南下とその様態-石匙・石槍・槍状石器-」『茨城県考古学協会誌』第35号 茨城県考古学協会 pp.1-30
- 橋本勝雄 2023c 「大木系石器群の中部以西への波及とその様態-和歌山県天田橋南出土の石匙から-」『紀伊考古学研究』第26号 紀伊考古学研究会 pp.1-16
- 橋本勝雄 2024 「下総台地北東部採集の石器の特質とその意義-伊藤陸憲氏・横田清隆氏・高野安夫氏コレクションから-」『千葉文華』第47号 千葉県文化財保護協会 pp.1-10
- 萩野谷悟・橋本勝雄 2024 「茨城県那珂市東ノ前遺跡の石槍-関東以西における大木系石器群の悉皆調査の成果を踏まえて-」『茨城県考古学協会誌』第36号 茨城県考古学協会 pp.99-118
- 原田昌幸ほか 1990 『銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書』粟島台遺跡発掘調査会
- 吹野富美夫 1995 「梨ノ子木久保遺跡出土石器の再検討」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会 pp.121-127
- 吹野富美夫 2008 「土塔貝塚出土の大木系石器について」『埋蔵文化財部年報27 平成19年度』茨城県教育財団 pp.51-56
- 横田清隆・伊藤陸憲・藤田富士夫 2021 「千葉県粟島台遺跡採集の玉類について」『玉文化研究』第5号 日本玉文化学会 pp.33-36